

---

# 仕返し（？）のX'mas

a n g e l

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仕返し(？)のX'mas

### 【Nコード】

N6038F

### 【作者名】

angel

### 【あらすじ】

新一と快斗は蘭と青子にデートをドタキャンされる。そのことに腹が立った2人は？いろんな人を巻き込んだのクリスマスどうなるのか？

**f i l e 1 : 初雪 (前書き)**

この作品は、ハロウィンの続きです!!  
でもあまり関係ないですけどね・・・

感想・評価お待ちしております!!

## file 1: 初雪

今日は12月1日。外では雪が降っている。東京にしては珍しい。新一がそう思っているとき、1本の電話がかかってきた。

「もしもし、工藤か？」

その声の主はいきなり切り出してきた。

「ああ。つてか、俺にかけてきたんなら自分の名前を先に言えよ！」

「言うたらんかったか？言うた気がするんやけどなあ」

「言っていない！！1度もない！」

新一は少しキレていた。別に平次の対応にキレていた訳ではない。その理由は6時間前――

「ごめん新一！待った？」

「いや、待ってねえよ。じゃあ、行くか！」

待ってなかったわけではない。もうすでに30分待っていた。新一は今日のデートを楽しみにしていた。だから予定より1時間も前に来てしまったのだ。

「今日はトロピカルランドだね！ハロウィン以来だね、ここ来るの」

「ああ、そうだな」

新一はハロウィンに関してはトラウマがあるので多くは語らなかった。

そして、その2時間後、新一にとって衝撃的な事件が起こることになる。

2時間後、蘭たちは噴水のところでコーラを飲んでいた。すると、いきなり目をふさがれた。

「さあ、俺たちは誰でしょう？」

新一には聞き覚えがある声だった。新一は向こうの要望どおり答えてやることにした。

「快斗だろ？何してんだ、こんなところで」

「当然遊びに来たに決まってるだろ？青子と一緒にな」

快斗はその後2人を見て言った。

「2人はデートか？」

新一と蘭は顔を真っ赤に染めた。快斗はそれを見てさらに冷やかした。

「おっ、凶星だな？さすが。ラブラブだなっ！」

冷やかされて真っ赤になっている新一と蘭を見て、少しためらったが、青子はお願いをした。

「蘭ちゃん、2人でデートなのにこんなこと言っているのか分からないけど・・・青子と一緒に回らない？」

「「「えっ」」」

蘭だけでなく新一や快斗も驚いていた。

青子はその理由を話し始めた。

「だって、デートぐらいいつでも出来るけど、青子と蘭ちゃんとはなかなか遊べないじゃん！」

「・・・いいわよ！確かになかなか青子ちゃんと遊べないもんね！」

その後蘭は新一の前に、青子は快斗の前に立って言った。

「じゃあ、新一。私と青子ちゃんは一緒に遊ぶから！新一は快斗君と遊んでて」

「じゃあ、快斗。青子と蘭ちゃんは一緒に遊ぶから！快斗は新一君と遊んでて」

「「ちよつと待てよ！蘭！」」

同時にそう叫んだが2人はもう人ごみの中に消えてしまっていた。

「くそっ！！おい、どうしてくれんだよ！今回のデートは2週間ぶりだったんだぜ！」

新一は快斗に当たった。しかし快斗も新一に当たった。

「蘭ちゃんが承諾しなかったら俺だってもっと一緒に居れたんだよ！」

2人はしばらく責任を擦り付け合っていたが、しばらくして新一が言った。

「待て、アイツに俺の大切さ分からせればいいんだよね？」

そして、1人でしばらくぶつぶついていたが、いきなり顔をあげると、手招きして快斗を呼び寄せた。

「あのさ……」

**file1:初雪(後書き)**

前々から言っていたクリスマスバージョンの話、書いてみました。  
意外とすんなり思いついたので3話までは作ってます！

これは楽しいハロウィンパーティの続編ですが、そっちは読まなくても分かるようになっていきます！

では、お楽しみください



## file 2：秘密の談話

・・・ってなワケなんだ、どうだ？」

新一は快斗に自分の意見を言った。快斗はその話に乗り気になった。

「いいな、それ！じゃあ、ダブルデートか？」

「いや、服部だってハロウィンには苦い思い出があるんだ。ここはトリプルデートだろ」

「そうだな。じゃあ、5日後、カフェに集合な。新一は平次呼んどいてくれ」

「ああ」

新一と快斗はそれだけ話すと、それぞれ帰っていった。

このことを思い出していた新一は平次が話し始める前に、話を切り出した。

「なあ、服部、クリスマストリプルデートしねーか？」

平次はこれに大きく反対した。

「はあ？俺は行かへんで。あのときみたいになんのは嫌やし。それに俺はもう和葉と約束してるんや！」

新一はこの発言にとても驚いた。

「えっ！服部が！？お前は一人でクリスマスをすごすのかと思ってたぜ」

平次は声を荒げて言った。

「俺は同じ過ちは繰り返したくないんや！だから行けへん。デートはダブルで頑張ってくれや」

それを聞いて、新一はケータイの前で笑った。人を見下すような笑いで・・・

平次にはそれが癪に障ったようだった。

「お前、なに笑うてんねん！」

新一はかつての思い出を切り出した。

「おまえなあっ・・・7月デート失敗したって言ってたじゃねえか。GWは誘いも出来なかったって・・・そんなやつに今回上手く行くとは思えねえよ」

平次は声が小さくなったようだった。

「そりゃーそうやけど・・・工藤も似たり寄ったりやないか」

新一は待っていたというように間をおき、言った。

「だ・か・ら、探偵2人と怪盗1人で考えるんだよ。優秀な3人で

考えれば、楽勝だよ」

「優秀とは思えへんねんけど・・・まあええわ。参加したるわ！で、いつ予定立てんねや？」

新一はすぐ答えた。

「3日後だ。俺と快斗が集まって考える」

平次は即座に突っ込んだ。

「ちょー待て！俺が入ってへんねんけどどういうことや？」

「お前は冬休みが始まってから・・・だから18日ぐらいに来てくれればそこから3人で考える」

平次は納得できない様子だった。

「何でや？俺も入れてくれや」

新一は小学生相手のような口調でなだめた。

「服部君、君はもうすぐ大学受験じゃなかったかい？推薦で入れるとしても単位とか出席日数が足りなかったら意味がないだろう？和葉ちゃんもそうだ」

平次はだんだん腹が立ってきたようだった。

「工藤、しゃべり方がイラつくからやめてくれ！分かった。冬休みが始まってからしか行かへんから！ええやろ？それで」

平次はイラつきながらも理性は保たれていた。だから新一の意見も正論だと思ひ了承した。

「よし！で、服部の用件ってなんだったんだ？」

「ああ、それは入試はそっちで受けるからしばらく工藤の家に泊まるってことや。和葉はどこがええやろ？」

「お前、断定してねーか？俺は貸すなんて一言も言っただろ！和葉ちゃんは蘭の家で良いと思うぜ！じゃな」

それで電話は切られてしまった。

そこには5分26秒と刻まれていた。

「意外と短かったんやな」

そういった後、平次は窓を開けて空に浮かぶ満月を眺めていた。

**f i l e 2 : 秘密の談話（後書き）**

これは昨日投稿したのと同じものです。でも、1日に2話投稿するのもどうかと思ったので、今日投稿します

評価・感想お願いします！

### file 3：綿密(?)な計画

5日後である12月6日、快斗と新一は集まっていた。指定していた“カフェ”で・・・

「もし服部が来てもアイツには分かんねえだろ」

「ああ」

新一たちは話し合っていた。もちろんデートについて。彼らはカフエRoyalにいた。

「ここは大阪の地理しか知らない服部には来れない場所だよな」

快斗はここを選んだ自分がすごいと思っていた。ここを指定するのはカップルばかりで、こういうところに慣れてなさそうな平次には入れないと考えていたからだ。

快斗が自惚れしているのを新一がとがめた。

「これぐらいで喜んでたら、デートコースもたいしたものじゃなくなるぜ。じゃ、考えるか」

新一はシャーペンを手にとってパンフレットを眺めていた。2人とも静かな環境にほっとしていた。ーーのもつかの間、この店内には合わない大きな音が鳴り響いた。

「うつせえな、何が起こったんだ？」

新一と快斗が顔を見合わせていると、色黒の高校生がやってきた。

「お前ら、俺がここの場所に来れへんと思っとなやろ！」

「あ、ああ・・・なんでお前にここが分かったんだ？」

平次は怪しげな笑いを浮かべた。

「お前の彼女のお陰や！工藤はどこやって言うたら、すぐ教えてくれたで。それに今日は土曜日やしな」

「蘭！何でばらしちまったんだ！」

新一は蘭を口止めしていなかったことを悔やむばかりだった。

「なんで俺を呼ばなかったんや！俺が居たほうが良かったんやないのか？」

「お前が来ると集中できないんだよ！お前電話で納得したじゃねえか！」

平次は近くにあった椅子を引くとそこに座った。

「俺はよく考えたんや。そのまま工藤の言いなりになってええんやろかってな。だから来たったんやー！」

快斗がすぐさま平次に突っ込んだ。

「お前が居ると全部失敗してるから呼ばなかったんだよ！」

「なんやと!？」

そこから3人の口論が始まった。店から追い出されるほどではなかったが、かなりうるさく、客がどんどん帰っていった。

「ほら、帰っちまつてるだろ!ちゃんと考えるぞ!！」

新一が真っ先に注意した。そこから計画の立てあいが始まった。といつても行きたいところを選ぶだけだが・・・

2時間ほどして3人とも計画が立て終わったようだった。

「よし、次は3日後に集まるぞ!！」

それに服部が猛抗議した。

「仕方ねえだろ。俺らも忙しいんだからな」

「俺のことも考えーや!！」

平次はしばらく文句しか言わなかった。そして奇妙に笑った後帰って行った。

「工藤・・・服部壊れたな・・・」

「ああ・・・」

2人はまだ知らない。このとき服部が何を考えていたのかを・・・



**f i l e 3 ; 綿密(?) な計画(後書き)**

久しぶりですね！

あまり投稿してませんでした・・・  
今日は久しぶりに投稿します！

テストは・・・もうだめでした・・・  
次はもっとやらないとダメですね・・・

次は火曜日に投稿します

では

file 4・消える自信・・・

12月9日の午後6時頃――

「よし、ここなら100パーセント来ねえ」

そう言ったのは快斗。

「いや、200パーセントだな」

と返したのは新一だった。

「そうだな、これも新一のお陰だぜ。お前が和葉ちゃんと平次のデート計画したんだからな。さすがだぜ、東の高校生探偵」

「いや、その面ならお前が手伝ってくれねえと出来なかったんだ。感謝してるぜ」

そう言つて2人はハイタッチした。

周りから見れば奇妙だったことだろう。

格式高い店で高校生がハイタッチしたのだから・・・

「けど、これが上手く行つたのは和葉ちゃんのお陰だな」

快斗は感心していた。

「ああ、ここまでうまくいくとはな。やっぱ、服部の為には使えるな。じゃあ、そろそろ始めるぞ」

そして、やっと作業が始まった。前回の資料をみて、デートスポットを選んでいた。10分ほどして新一が言った。

「海は絶対行くぞ！あとトロ・・・あ？」

新一が横を見ると快斗が手を新一の腰に回してブルブル震えていた。

「魚だけは・・・ダメだ！」

「おい！手を離せ！・・・わあったよ！自由時間作ってその時間自由にするから、な？」

その瞬間快斗の顔がパアッと輝いた。

「新一、サンキュ！」

そうして、新一に抱き着いた。

「おい。抱き着くんなら無しにすんぞ！」

この時新一からものすごく殺気があふれだしていた。快斗は急いで手を離れた。新一は続けて言った。

「それは2時間ぐらいにしよう。あと、泊まりこみでいいか？」

「2日遊ぶのか。・・・よし、そうするか」

そして、彼らは1時間半程して行きたい所を決めた。

「・・・よし。あとはどう組み込むか、だな」

その時だった。

「お客様、4番にどうぞ」

ウェイトレスが言ったようだ。新一はそれに疑問を感じた。

「待て、4番テーブルはここだ！」

快斗はすぐ番号を見た。

「ああ・・・まさか平次か!？」

「そのまさかや」

新一がはつとして後ろを見ると、色黒の男が立っていた。

「服部！和葉ちゃんはどうした!!」

その瞬間、平次はほくそ笑んだ。

「やっぱお前らの仕業やったんか。ま、楽しませてもらたで」

平次は快斗を振り返った。

「快斗が和葉に学校休みやて聞いたんやろ？だから、和葉にデートを持ち掛けたんや」

「なっ、そんなわけ・・・」

「快斗、動揺しとる。ポーカーフェイスはどこ行ったんや？」

快斗は平次に指摘されるほど動揺していた。

それは恋愛は俺に任せろと言っていたにも関わらず、失敗したかららしい。そういうことをぶつぶつ呟いていた。

平次は続けて言った。

「今日はここまで、デート、したんや」

「なんでここって分かったんだ？」

「それはな・・・」

平次の推理が今始まった。

**file 4・消える自信・・・（後書き）**

再び同じような場所での話になりましたね・・・  
次に時間軸は戻りますがデートの話でも書きます。

個人的ですが、今回期末かなり悪かったので、投稿頻度は悪くなります。

では、また

## file 5・平次の名推理

「・・・まず、お前らの行動や！明らかにおかしいんや。俺が電話かけると長話するやる？お前らはな、普段は電話短いんや。あと、俺を大阪に帰す時の態度がおかしかったんや！さすがの2人も自分には鈍いからなあー」

こっそり新一はぼそつと呟いた。

「お前もな」

平次は即座に切り返してきた。

「俺は鈍くないで！ちゃんと分かってる。探偵やからな」

新一は探偵としてのプライドを傷付けられた気がして腹がたった。

「ああ？お前はいつも和葉ちゃんに逃げられてんだろ？そんな奴に探偵じゃないみたいなこと言われたくないな」

2人の目に火花が散りはじめたのを見た快斗は止めにかかった。

「新一、落ち着け。平次、なんでここが分かったんだ？」

新一はまだ苛立ちが残っているようだったが、言い争いは止めた。平次はまた話を始めた。

「でな、おかしいな思つて青子ちゃんに電話したんや。黒羽、工藤と出かける予定あらへんかったか？」ってな。青子ちゃんは優しいからなあ。言うてくれたで。今日出かけるってなあ」

「青子！あれほど口止めたのに！」

行き場のない怒りを抱えた快斗に平次が思い出したように言った。

「これ、快斗に土産やって」

そう言っただけで平次は貝のネックレスを取り出した。

「平次、それを捨てる！」

快斗は怒鳴った。しかし、平次は捨てなかった。

「これは、青子ちゃんが自分で選んだ貝で作ったやつなんや。手作りやな。それを捨てるんか？」

快斗はそれを平次の手からすぐ奪い取ると、首にかけた。新一と平次が言った。

「快斗、魚嫌いじゃなかったか？」

「それに季節合ってたんで？」

しかし快斗はそれを離さなかった。しかも、顔が赤く染まっていた。

「なるほど」

新一と平次は納得した。貝を見て、笑っている快斗を見た平次は、快斗を無視して、新一だけに言った。

「最後の皆は蘭ちゃんやったら工藤の方に着いて言わへんと思ったから園子ちゃんに聞いたんや。『なんか聞いてないんか』ってな。」



園子ちゃんはあるまり知らへん感じやったけど、読みは天才的や。デートについての話やったら工藤は意外と安い店にして、そこもデートのコースにいれるはず、だから、Donny's に行くってな」意外にも新一は疑問があるようだった。それを平次にぶつけた。

「なあ、服部、他にも店はあるはずだ。なんでここにしたらって分かるんだ？」

「なんや、そんな事かいな。2人は親友やろ？行きたい店ぐらい話してるやろ。それを教えてくれたんや」

新一は切れず、何か納得していた。

（成る程、園子に聞けばいいんだな）

そう思った新一は平次に感謝した。

「ありがとな、服部、お前のお陰だ」

「はあ？」

平次は訳が分からないようだった。そこに快斗が割り込んできた。

「成る程、園子ちゃんも頭いいな」

「快斗、夢から覚めたか？」

快斗は返事した。

「あれは貝だ。魚じゃないからな。大丈夫。あと、さっきその園子ちゃんからメールあったんだけど、クリスマスデートやりたいらしい。園子ちゃんは特別にこっち側だけいいな？」

新一と平次は了承した。

「よし、仕切り直した。服部、ここに居ていいぞ。理由は事件にでもしとけ」

「よっしゃー！じゃ、今日から工藤ん家泊まるな！」

「あ、じゃ、俺も!!」

こうして、3人で住むことになった。自分達は大丈夫だろうか・・・そんな不安もある中、デート計画は進んで行く・・・

file5・平次の名推理（後書き）

すっかり忘れてましたよ（汗）

これの投稿を。昨日気づいて急いで書きました。  
心配ですっ！間違っていないですか？

あったら教えてください！そこーで直します！

感想など、よかったらください！  
待ってます！

## file 6：新一の電話

そして1週間ほどたった12月15日・・・

あれから結局平次は和葉に強制的に連行され、家に連れてかえられ、快斗も、青子に言われ、家に戻った。

平次は、和葉と痴話喧嘩しながらだったが、意外にも、すぐ帰っていった。

「はあ。うるさい奴らがいないと落ち着くな」

そこは、帝丹高校の屋上だった。

そうつぶやきながら、うとうとしていたところに園子がやって来た。

「工藤君、結局いつ決めるつもり？」

そう相談してきた。

眠いながらもちゃんと返事した。

「そうだなー、20日ぐらいか？服部はその日終業式だしな」

園子はしばらく黙りこくっていたが、しばらくしたら頷いた。

「仕方ないわね。その日からね」

「じゃ、決定な。じゃ、俺は電話しとくから」

そう言って、ケータイを取り出した。するとそのケータイを新一から取り上げた。

「工藤君、電話終わったら寝るつもりね。事件があった事にして授業サボるつもり？あんたのお姫様が心配するわよ？」

新一はすくつと立ち上がると、園子からケータイを取り上げた。

「わあったよ。授業出るから！電話はしとくから安心しろ」

「今日出た小説にハマって忘れないようにしなさいよ。あと、行きたいとこ決めといて」

「ああ」

そして園子はすたすたと歩いて去っていった。

新一はすぐにケータイで平次に電話をかけた。

平次はすぐに出た。

「なんや、工藤、用件ははよ言いや。あと1分で授業やねん」

「5分はいるぞ。―――よし、お前授業サボれ！」

平次は周りの人になにか言ったようだった。

「よし、じゃ、サボったるわ！工藤はサボるんか？」

「ああ。園子には咎められたけどな」

平次は再び周りになにか話したあと、歩いて行った。

「で、なんや？」

新一はさつき決めた事を話しはじめた。

「20日にこっちこい。蘭の話ではちょうど休み1日目だろ？」

「ああ、和葉は置いていけばええねんな？で、後の4分はなんや？」

「取りあえず、行きたい所言え。前は途中からだったから決めてねえだろ？」

平次は間を置いて言った。不敵な笑みをもらしながら・・・

「もう決めてあんねや。じゃ、後から言うとかわ。快斗にも同じこと言つとけばええんやろ？」

「よく分かったな。くれぐれもばれないようにな」

「分かってるわ！じゃ、俺はせっかく屋上にきたんやし昼寝するわ！じゃあな」

そう言つて電話が切られた。

「思ったより早く終わったな。ま、服部が決めてたからだけど」

新一は無意識の内にそう呟いていた。

file 6：新一の電話（後書き）

やっと書き終わりました。 疲れましたね（汗）

まさか電話編でこんなに時間がかかるとは・・・

次回も同じ電話編ですが、全然違います！

今回が次回につながる感じですかね？

もうすぐ、冬休みです！後2日！それが終わったら、部活だけなの  
で、案外早く進むと思います！！

では、今日中に、もう一話投稿しますね

## file 7：新一の裏事情

一方、快斗と平次は・・・

ブルブルとポケットが振動したので、快斗はポケットからケータイを取り出した。

しかし、メールではなく、電話だったので快斗は立ち上がった。

「先生、黒羽快斗早退します！」

「ちょっと快斗、なに言ってるのよ！」

快斗はその青子の声を無視して、先生の方へ近づくと、ウインクをした。他の生徒にはよく見えなかったようだが耳元でなにか囁いていた。

先生はそれが効いて、なにも咎めなかった。

快斗は青子の追跡を振り切り、屋上へ行くと自分から電話をかけ直した。

「快斗か？はよ出てくれや」

「こつちも授業があつたんだよ。で、何の用だ？」

平次は先程の話をした。

「成る程な。でもどうして昼休みなした話がこんな遅くにかかってくるんだ？」

平次は照れながら言った。



「それはな・・・昼寝が原因なんや」

「平次、もっと早くかけてくれ。そしたら青子に追いかけることもなかったのに・・・めんどかつたんだぜ」

「まあ、堪忍したつてや」

快斗は平次のその喋り方に上手くまるめこまれてしまった。

「仕方ないなあ。そういや平次、俺らは予定決めた事知ってんだろ？なんか言いたいことあんじゃねーか？」

それを言った瞬間平次が黙りこくってしまった。それで快斗は待つことにした。

しばらくするとやっと平次が口を開いた。

「最近工藤俺に対して冷たすぎるんやないやろか。快斗との対応が全然ちゃうで」

それを聞いて快斗が笑った。

「なにがおかしいねん！」

「そんなこと簡単だろ、って思ってたさ」

平次は訳が分からなかった。漫画なら頭の上にはてなが並んでいただろう。快斗は見るに見兼ねて助け船をだした。

「お前ら割と仲良くやってんだろ？帰るときも楽しそうだったしな」

「まあな。でも工藤達の方がもつとええはずや」

快斗が意味深な間を置いた。そして凄く小さい声で話しはじめた。

「実は、新一が蘭ちゃん、俺が青子と一緒にデートした時、偶然新一と会ってな。女同士でくつついちゃったんだ。それからしばらく喧嘩になったんだけど、俺んところはより戻したんだけど、あいつはまだだからな。仲いい奴を見ると腹が立つんだろーな。まあ、俺はその場にいたからキレられてねーけど」

平次は今の説明で何となく分かったようだった。

「要するに八つ当たりやな。だからそれをやめさすために黒羽がこんなに動いてくれてるんか？」

「そうだな・・・やっぱこんな空気やだからな。これが直るチャンスは24日だけだ。頑張らないといけねーだろ」

「そつやな、じゃ、お互い頑張ろつや」

そして電話は自然と終わっていた。

（工藤、意外と人間っぽいな。）

平次はそれを考えると笑いが止まらなくなった。3人は、終業式まで、とても長く感じていた。

## file7：新一の裏事情（後書き）

さっき言ってた分です！

快斗が新一について平次に教えます！前のよりは仲がいい感じで好きなんですけどですか？

また、ミスとかあったら教えてください！

Nozomiさん教えていただきありがとうございました！  
では

file 8：計画ミスを探せ！

とうとう12月20日がやって来た。

新一、快斗、平次、園子は近くのアミレスにいた。

「計画出来た？」

園子はそう言うと、3人の顔を眺め回した。

新一は1番手で話し始めた。

「俺は、取りあえず海に行きたいんだ。あそこには思い出があるかな」

快斗はその発言に違和感を感じた。

「新一、前気づかなかったけど、冬に海はおかしいだろ」

園子は同意した。

「おかしいわね。まだ雪を見に行くとかなら分かるんだけど」

「そうや、今海に行ったってなにも面白いことあらへん」

平次までもが言いはじめ、新一は立場が悪くなった。

新一は他にも、値段が高い所は禁止、蘭のことを気にしながら動くなど、様々な所を訂正された。

園子は小声で一言だけ助言した。

「蘭とより戻すには今回がチャンスよ。しっかりしなさい」

園子の友達に対する思いは新一にも伝わったようだった。

次に平次が計画を話した。

「俺はやっぱデートはドライブだな。途中で色んな所へ行きたいねん」

園子は真面目な顔付きになった。

「それ、いつもじゃない！！せっかくやるんだから、新しいものを増やさないと。服部君はこっちにいない分、和葉ちゃんだって新鮮さがあると思うわ」

「そうやな、じゃ、しばらく探さなーいーいや、もう時間足りひんしな・・・」

平次はそれからずっと考えていた。

そんな平次を無視して、快斗は話しはじめた。

「じゃ、俺だけど、行くところはここなんだ」

そう言って紙を見せた。園子はしばらくその紙を眺めていたが、顔をあげると頷いた。

「あの2人と違うわね。さすが！じゃ、黒羽君は安心ね」

「そこで提案なんだけど・・・1日目はずっとトリプルデートって

話だったけど、夜は1回しか来ねえじゃん？だから夜は特別に別にしねーか？」

園子は紙に目を落としながら言った。

「確かにね。それいいわ！じゃ、変えるわよ」

そうして、みんなのデート計画は進んで行った。新一は蘭と仲直り出来るか？平次は新しいところを見つけられるか？快斗は計画を上手く進められるか？

file 8 : 計画ミスを探せ！（後書き）

1日分投稿遅れてます（汗）  
気にしないでくださいっ！！

今回の計画どおりに進んでないので、こういうこともあると思います。が、明日からは大丈夫！！だと思います！！！！  
では！

## file 9：まさかの遅刻

とうとう12月24日――ついに泊まりがけデート計画が始まった。

最初に来たのは意外にも、快斗達だった。

「あいっら遅いな。なにやってんだ？」

すると青子が強い口調で言った。

「みんな快斗と違って忙しいの！結局12時から始まるって言われたのに、何でこんなに早く出たの！」

「しゃーねえだろ。やることねえんだから」

青子はちよつと考えると快斗に提案した。

「じゃあ、この時計が見えるこの店で時間潰さない？」

「ああ。青子にしてはまともな提案すんじゃないか！」

青子は頬をぶくつと膨らませた。

「青子にしてはってなによ！」

口論をしながら行ったので、結局行くのに20分もかかってしまった。

2人はしばらく黙っていたせいか揃って眠ってしまった。



しばらく経って――

「・・・眠いなあ・・・って今何時？快斗起きて！」

青子はやつと気づいたようだった。

快斗は青子に言われて起きたものの眠いのが見てうかがえた。

「何だよ、もう少し寝かせろ」

青子はそういわれたので時計を快斗の目の前に突き付けた。

「なんだ1時――1時！？」

快斗はすぐ外を見た。

「あいつらいるぞ！！蘭ちゃん達とはかく新一達はやべえ！」

「早くお金払わないと！」

2人は急いで店を出ると、時計台前へダッシュした。

時計台に着くと、やっぱり新一と平次は怒っていた。

「快斗、なんで遅れんだ！」

快斗が言い返す前に次は平次が言ってきた。

「俺やって30分しか遅刻してへんで」

「平次、あんたのせいやで！！バイクのカギ無くしたなんてアホち

やうか？」

青子は快斗が言いかえせないのにいらいらしていた。そして、ついに大声を張り上げた。

「ごめんなさい。青子達、1時間前に来たけどたた寝しちゃって・・・」

それを聞いた新一は青子を慰めた。

「青子ちゃんが心配することじゃないさ。悪いのは快斗だよ。エスコートしねえといけなかったんだからな」

「青子が悪いよ。つい寝ちゃったから・・・」

「そつだよ、アホ子が悪い！」

青子はそれを聞いてキレたようだった。

「はい？バ快斗！あなたも悪いわよ！」

「おっと、気安くあなたなんて呼ぶなよ。夫婦と思われたら困る」

「こつちだつて迷惑よ！」

2人は学校でやっているような喧嘩を始めた。平次や和葉も力ギのことでまだ言い争っていた。

新一と蘭はしばらく放っておいたが、收拾がつかないので、蘭は新一に相談した。

file9:まさかの遅刻(後書き)

あとがきはまとめて書きますので!!

## file 10：2人でボーリング

まず彼らがデート場所を選んだのは、ボーリングだった。

「何で俺がやらなあかんねん」

「そんなん知らん！あんたたちが決めたんやんか！うちに聞かれてもわからへんで！それともしたくない理由があるん？できへんとか？」

平次はその瞬間びくつとした。

和葉は勝ち誇ったような顔になった。

「ふーん。なるほどなあ。だから平次ボーリングせえへんかったんやな」

その後、和葉は慰めてあげた。

「安心しい。うちとチームやんか！うちは強いでー！！」

「任せるわ」

そういった後、蘭が声をかけてきた。

「和葉ちゃん、服部君、始めましょう。早く来て！」

3人は、急いで新一たちのところへ行った。

6人集まると、新一が仕切り始めた。

「じゃ、始めるぞ！ルールは一番たくさんストライク、スペアをと

れば勝ち。スペアの2倍ストライクは点が入るって事だ。その代わり他は点がない、いいな？」

「はぁーい」

みんな前から聞いて、納得していたので文句は言わなかった。そして新一が投球しようとしたそのとき、後ろから声が聞こえた。

「はーい！私よ！！」

蘭は驚いていた。

「園子？何で？」

園子は新一を軽くにらみつけた後言った。

「新一君達から聞いてなかったのね。面白そうだから私も参加させてもらうことにしたの。京極さんを迎えに行かないといけなかったから、遅れたけどね」

そういつて園子は笑った。

和葉は園子の隣に居る真を見ていった。

「かつこええやん！園子ちゃんの彼氏？」

その発言には真が答えた。

「園子さんがそう思ってくださってるんですけど・・・」

「もちろんよ、真さん」

平次は2人の永遠に続きそうな会話を切った。

「分かったって。靴は履き替えたんか？」

「もちろん。そこまでマナー悪くないわよ！」

そしてボーリング大会の火蓋が切られた。

#### 男子――1セット目

じゃんけんの結果まず新一が投球することになった。

新一は投球体勢に入った。そのとき声が聞こえた。

「新一、頑張れ！」

蘭の応援だ。これにより、変な力が抜けたのか、スムーズに投球した。

新一はもうボールを見ていなかった。

100パーセント入る自信があつたから・・・

もちろん、ストライクだった。

「新一――！すごい――！」

「よし」

快斗は冷静に見ていた。

「新一はストライクか——まあまあだな。よし俺の番——！」

快斗はそういうとボールを持って投球体勢に入った。

「快斗——頑張れ」

青子はさっきのことが忘れられず、快斗の応援の声も小さくなった。それで快斗は取り乱した。

「あ——!!」

流れに任せて投げた球——それは6本倒しだった。

「くそつ。普段ならもつと……」

そして間髪いれずに次の球を打った。

「2本ね。合計8本」

園子が言った。快斗が苛立ちを新一と平次に言っている間、蘭は青子呼んだ。

「青子ちゃん、ちょっといい？」

青子は言われてそこまで走っていった。

「なーに？」

「快斗君、もっと応援してあげようよ！じゃないともっと不調になるよ？頭はすごくいいけどまだ高校生なんだから」

「分かった。ありがとう蘭ちゃん!!」

青子はすぐ戻ると快斗にこうささやいた。

「次頑張ろ!」

快斗の気持ちを鎮めるにはこれで十分だった。

「じゃ、俺やな、和葉、おれが取れへんかった分、フォロー頼むな」

「任せとき」

みんな、この2人はチームワークが良いとそのとき思った。和葉は何も言わなかったがさっきので十分だった。

平次は1投目を投げた。

「9本。惜しい!!次でスぺアや!!」

「ああ。いくで!!」

2投目――ボーリング玉はゆっくりと弧を描きピンのど真ん中を打った。

「よし!スぺアや!」

平次たちは見事スぺアをとることが出来た。いまいちぱつとした成績が出ない彼らがあんなに取れたのはすごいとみんな感心していた。



「最後は僕ですね」

真は立ち上がると、すぐにボーリング玉を投げた。

それは見事なフォームで、もちろんストライクだった。

「真さん、さすがー!!」

「園子さんにプレッシャーがかからないようにしただけです」

みんなはこのチームは要注意と思っていた。

## 女子――12セット目

まず、蘭が投球することになった。

蘭は一応プレッシャーがあるらしく、手が微妙に震えていた。

新一は耳元へ行ってそつとささやいた。

「安心しろ。俺がどうにかしてやるから」

蘭はそれで満足だった。

1球目を投げた。不安定な軌道だったせいか7本しか倒せなかった。  
2投目も健闘して、結局スピア止まりとなったが、2人は満足そうだった。

「次は青子かな？」

そういつて青子はボールを持った。

「青子待て！」

快斗はそういつと青子に言った。

「もう細かいところはいい。青子は運動神経ないからな。その代わり思いっきり投げろ！」

「分かった」

そして渾身の力をこめて投げた1発――それは見事すべてのピンを倒した。

「青子、良く出来たじゃねえか！！」

そして2人が喜びに浸り終わった頃和葉が出てきた。

「うちを見ててみ」

そういつて投球した。自分で言っているだけあって、上手かった。もちろんストライクだった。

「さすが和葉！見直したで！」

そう言い、和葉と話しあおうとしたその時園子がやってきた。

「私ね！よしやるわよ！！」

園子が意気込むと真は近くに來て一言だけ言った。

「園子さんは大丈夫です。自信を持って」

「はい！」

園子は投げた。惜しくもストライクを逃し、スピアとなってしまったが、それはそれで満足そうだった。

### 男子―――最終

最終回は、今回の目的である、『自分たちは出来る』ということをお教えるため、最終と入れ替えた。

結局新一＆蘭は、ストライク4本、スピア1本、快斗＆青子はストライク3本スピア4本、平次＆和葉はストライク1本、スピア4本、真＆園子はストライク4本、スピア4本となった。

よって真＆園子が圧勝し、平次＆和葉は負け決定なので、時間も考へ、新一vs快斗だけとなった。

新一は沈黙の中投球した。1球目では完璧に入りきらず、1本残った。少しあせりの表情も見られたが、スピアをとることが出来た。よって快斗たちはストライクなら勝ち、スピアなら引き分けなのでもう一回、それ以外なら負けと決まった。そんな一大事に快斗はありえない一言を口にした。

「――青子、投げろ」

「青子が――無理よ、入んないもん」

快斗は青子に詰め寄ると言った。

「ストライクさっき決まっただろ？自信もて！」

青子は不安だった。が勇気を出して投げた。とても不安定な軌道を描くボール。誰かが無理だと思った。

しかし次の瞬間ピンは倒れた。すべて・・・

「快斗!!」

「青子!!」

2人は今まで見たこともないくらい嬉しそうだった。

逆に新一たちは悔しそうだった。が立ち直ったようだった。

## file 11・恐怖のお化け屋敷

ボーリングが終わった頃――もうすでに4時になっていた。それからトロピカルランドに行った。

「もう5時かー。じゃ、スケート行きたいなー」

蘭がそう言っていると、新一が付けたした。

「超巨大お化け屋敷も追加。めったに入らないんだぜ。季節外れなのにめっちゃ売れてんだからな」

「そんなことよりも言われたって、怖いものは怖いの!」

平次は口論を止める振りをして、新一についた。

「まあ、珍しいんやったら行こうや!もう手に入らんかもしれへんで!」

「ええ!!私達はここにいるからいい」

それでも渋る蘭を見て、新一は蘭の腕を強引に引っ張った。

「何するのよ!」

蘭は新一の急な行動に驚いていた。

新一はそれに気がついていないのか、そのままずんずん進んで行った。

「新一聞してるの?」

蘭は苛立ってきた。それを察知したのか、耳元で小さく囁いた。

「俺を信じる。怖く無いようにしてやるから」

「――分かった」

2人が納得し、お化け屋敷に入るとき、快斗は平次に言った。

「あの2人のもつれはあれだ」

平次は聞いた。

「頷いとつたのにか？」

快斗は頷いた。

「ああ、だって間がおかしかったからな」

「成る程な。確かにちよつとうるたえとつたな」

平次と快斗はその後相談し、新一が出てきたら聞く事にした。

「平次！！行かんの？あんたが行きたいって言うたから付いて行つたげるんやで？」

「ああ、じゃ、行くで」

そのあとに続いて快斗達が進んで行つた。

その時、和葉と青子も気づいていたのには2人は気がしてつかなかつたのだ。

そして、真と園子は最後に行った。

「園子さん、怖いなら、言っして下さいね」

「ええ」

そうして、全員入っていったのだった。

――20分後――

平次と和葉は出てきた。

「平次、意外と面白いなあ。それほど怖く無かったし」

平次はそう言った和葉に教えた。

「アホ。この中には4通り道があつてな、俺らが行ったのはb。余り怖くないとこや」

「へえー。そうなんや。大阪に住んどんによく分かんなあ」

和葉は平次に感心しているようだった。

平次は目的を達成したのもう帰ってもいいと思っていたが、新一とのもつれを考えると、それも出来なかった。

「ん？工藤？どこや？」

新一がいない事に気づくと、2人は急いで探しはじめた。しかし心配もつかの間、新一がベンチに座っているのを目撃した。

「工藤君や！」

和葉がそう言ったあと走って行ったので、平次は追いかけた。

そこで、2人は蘭が寝ている――いや、気を失っている姿が目に入った。

「蘭ちゃんどうしたん？」

和葉は新一に聞いた。

「お化け見て、気を失ったんだ。一番怖いコースだったからな。俺がお姫様抱っこしてきた」

「お前、大胆やな。さすがや」

新一の行動に平次が感心していると後ろから声がした。

「仕方ないなあ、今日は夜はどうせフリーだし、お前らは帰れ」

新一は言われるまま、帰ろうとした。すると和葉と青子が新一に釘を刺した。

「今日中に元通りにしときや」

「蘭ちゃんと一回ちゃんと話し合って！」

新一は頷くと、そそくさと帰って行った。

「あーあ。せっかく計画したのに。まあ、いいわ、楽しくなりそう



だし」

そう言った人物――それは園子だった。

「何する気だ？」

快斗は恐る恐る聞いた。

園子は自信を持って言った。

「もちろん、蘭と新一君の修復よ！！ホテルに急いで！私のパパのホテルだから話が聞こえるはずよ」

そして6人は向かっていった。果たして2人はどうなるのか？

## file 12・遅すぎる仲直り

「新一と蘭は米化ホテルの910に居た。

新一はドアを開けるとベッドに蘭を寝かしつけた。

「ふー。今日の予定が台無しだな」

新一は1人でつぶやいていた。

そして何もせずじっとしていると寝てしまった。

「ーあれ？何でベッドの中に？確かお化け屋敷で・・・」

そして先ほどのことを思い出し少しいらだって来た。

「新一が置いてくから悪いのよ」

そう言っていると隣に椅子に座って寝ている新一を発見した。

（もしかしてここまで1人で運んでくれたのかなあ）

そう考えると今まで起こっていたのが申し訳ないと思ってきた。  
しかし今までのことは消化できなかった。

「でも、前も置いていかれたから・・・」

そういつていると新一が目を覚ました。

「あ、蘭。大丈夫か？」

「う、うん。もしかしてここまで私を運んでくれた？」

新一は静かに頷いた。

「ああ、せっかくここまで連れてきたんだ感謝しろよ？」

新一にそう言われ、蘭は頷いた。そしてさっきから気になっていたことを聞いた。

「新一、怖がらせないようにするって言ったのに何で私を置いて行ったの？」

新一はなんの事か分からないようだった。

「だからさっきよ！新一が途中でいなくなっって気づいたらここに居たのよ」

蘭は一生懸命話した。

新一はやっと思いついたようだった。

「ああ。あの時か。あん時はたまたまケータイが無くなったから探しに行ってたんだ。戻って来たら蘭が倒れてるから驚いたぜ」

蘭はむやみに疑った自分に腹を立てた。しかし1ヶ月前の事は忘れられなかった。

「じゃ、この前のデートは？あの時はジュースを買ってくるって言っただけ戻って来なかったじゃない」

新一は蘭の疑いを晴らすため真剣に説明した。

「あの時は急に依頼が来たからな。一応蘭に電話したはずだけど」

そう言われて蘭は急いで履歴を見た。

そこには新一宛てのものが残っていた。

「あ・・・ゴメン。気がつかなかった」

新一は分かってくれて良かったとき思っていた。

新一は続けて話した。

「最近、蘭、態度が怖かったから普段通りに振る舞えなかったんだ・  
・こんな事言つのもなんだけど、俺に甘えすぎじゃねーか？」

新一に言われ、蘭ははっとした。

「そっか、そうだよな。ゴメン、新一。私、最近頼りまくってたね。  
私が悪いから・・・もう一度やり直してくれない？元通りになりたい  
いの」

新一は即答した。

「俺からも。じゃ、これ蘭にやるよ」

そう言っ取り出したのはネックレスだった。

「安いけど。じゃ、蘭後ろ向いてくれ」

蘭が後ろを向くと新一は丁寧にネックレスをつけた。

「どう？新一？」

蘭は頬を赤く染めて聞いた。

「似合ってるよ、蘭」

2人はいいムードになった。  
そこに誰が入ってきた。

「誰だ！」

新一は言った。すると意外にも声が返って来た。

「私よ」

園子の声だ。そして入ってきた人を見てびっくりした。

「全員居るじゃねーかー！」

新一が声を張り上げたのも虚しく、みんな好きに話し始めた。

「全部見させて貰ったぜ」

快斗だ。続いて和葉の声も聞こえた。

「これやで。ビデオや」

和葉はそう言ってみせびらかした。

「なんでお前らが！」

それには青子が答えた。

「ここは園子ちゃんのお父さんのホテルだからそういうの自由なんだった！」

新一は園子のやり方に逆に感心してしまった。

「ま、仲直りしたんやし良かったやないか」

「ああ、そうだな」

その日はスイートルールで宴会をした。明日のことまで忘れて――

## file 12・遅すぎる仲直り（後書き）

こんばんは！

突然ですが、今日は1日に4個ぐらい書いたので疲れました。間違  
いあったら教えてくださいね！！すぐ手直しします！！

ボーリングのところすごく長かったでしょ？

あれ、今日私がボーリング言ったからなんです！  
長すぎるのは許してください！

あと、今日はこっち投稿したので、また会える日までは投稿してま  
せん（汗）

明日はW投稿で行きますよ！！

だからこっちは今日ほど量無いですね・・・

ではまた！！

### file 13・楽しいスケート

みんな昨日遅くまで起きていたせいか、最初に起きた人でさえ10時起床だった。

「もう11時じゃねーか!!俺の予定が・・・」

快斗がそういつて嘆いていると、新一が突っ込んだ。

「仕方ねーだろ。あんなに遅くまで起きてたんだから」

「それにここも楽しかったよ!!」

蘭が思ったことを言った。平次は何か思いついたようで、みんなに言った。

「本当は今日は自由やけど、俺らは4時に帰らなあかんからスケート行ったら自由にせーへんか？」

「さんせーい」

快斗以外納得したので、今日はとりあえずスケートに行くことになった。

「快斗君、滑らないの？」



園子が聞くと、快斗が答えた。

「今日はリンクの調子がよくないんだ」

快斗は最もらしくそう言った。しかし余計な事を新一が言った。

「今日は滑りやすいぞ」

そう言つて快斗の周りを滑った。園子は快斗の耳元で囁いた。

「じゃ、青子ちゃんをしっかりとエスコートするのよ」

（無理だよ！俺も滑れねえんだから）

そう思っていると、青子が挑発してきた。

「そついや快斗は滑れなかったんだっけ？」

それを耳聴く聞き付けて来た平次が来た。

「なーんや。だから快斗滑らへんかったんやな」

「俺だつて頑張れば滑れる」

平次はため息をつくと言った。

「周りを見てみ。例えば工藤と蘭ちゃんや。あんなに優雅に滑つてんで。もっと凄いんは園子ちゃんと京極さんや。あの2人は天才やな。回転してんで」

快斗はそれを見てショックだった。みんな自分より上手いし、平次でさえちゃんと滑れたからだ。

ため息ばかりついていると、青子が言った。

「私が教えてあげるよ」

そして楽しいスケートの時間は過ぎていったのだった。

「じゃ、今から自由時間ね」

そついうとみんな別れて行った。

それぞれなにをするのだろうか――

みんな自分の目的地まで行く。今回の目標を果たすために――

file 13・楽しいスケート（後書き）

今回はスケートです!!

私が今行きたいところですね!!

この話はどっちかっていうとまじっく快斗的要素が多いですが、楽しんでもらえましたか？

次回で最後です!!

では!!

## file 14：みんなの行方

みんなそれぞれ何をしていたのだろうか・・・

### 新一＆蘭

新一は蘭が買い物に行きたいというのを押し切り、連れてきた。

「ここどこ分かるか？」

新一は蘭に訪ねた。

「え、ただの土手にしか見えないけど・・・」

新一は説明した。

「俺ら、中学の時1回喧嘩しただろ？」

蘭はその時を懐かしんだ。

「そうだったね。あの時結局自然に仲直りして・・・あっ！」

「分かったか？あの時アメーzingグレイス聞いただろ？その場所だ」

蘭は言った。

「そっか。私達、声には出さないけど喧嘩してたから・・・」

「そういうこと。しばらくいようぜ」

この時はまだ気がつかなかった。  
歌っていた本人が来るなんて・・・

### 快斗&青子

2人は時計台の前まで来た。

「昨日きたよ？快斗なにしに来たの？」

青子は本当に訳が分からないようだった。

「青子なら分かるんじゃないか？」

快斗はそう言った。青子はしばらく考えたあと、言った。

「分かった！初めて会った場所だ！！」

「ああ、ここは俺らの思い出の場所だ。時計台があって良かったな」

快斗は自分でやったことながらも、他人がやったことのように言った。

「そうだね」

そして快斗のマジックショーが始まった。

快斗は途中で呟いた。

「この鐘の音は渡せねえ」

#### 平次&和葉

「平次、みんな思い出の場所行くみたいやけど、うちらにはこっちに思い出なんてあんまないで。どこいくつもりなん？」

「黙って付いてきーや」

そう言って来た場所は、東都タワーだった。

「平次、ここ嫌いやったんちゃうん？」

和葉は不思議そうだった。平次は答えた。

「ある人が言うたんや。もっと新鮮な事した方がええってな」

和葉は敏感に察知した。

「園子ちゃんやろ？そう言うアドバイス得意やからな」

図星だ。平次は頷いた。すると和葉は静かに言った。

「そっか。じゃ、見に行こか」

そして見に行ったのだった。

これで平次は東都タワーについて考え直すことになる。

#### 真&園子

「真さん、私が連れて行ってあげたのに」

「いいからついて来て下さい」

しばらく経ってついたが、園子は連れて来て貰った場所にビックリした。

「真さん、ここって武道館じゃない？」

「はい、そうです。僕が初めて園子さんに会ったところです」

真は照れながら言った。

「ここは僕の思い出の場所なんです」

園子はその言葉に驚いた。意外だった。

「そうなんだ」

園子がぼーっとしていると、真が言った。

「目をつぶってください」

園子が言われたとおりにすると、園子の唇に真がキスをした。

「真さん？」

園子はとても照れていた。  
しかし真も劣らず照れていた。

「園子さん、僕は行かないといけません」

真は言った。園子は慌てて言った。

「私もいくわ!」

そうして2人は飛行場へ行った。

この企画で一番楽しかったのはこの2人かもしれない。



## file 14：みんなの行方（後書き）

最終回をとうとう迎えてしまいました。

結構好きだったんですけどなんか残念です・・・

今回は思い出の場所に行ってもらいました！

結構そういうの好きなんで・・・

でも新一たち一生懸命計画したけど無駄でしたね・・・

私は無計画で書いてしまったのですが・・・

無事に終わったのが奇跡です（笑）

次回作を書くと思うのですが、どんなのが良いですか？応募して  
まーす！！

自由にどんどん言ってくださいね！！

では（^^）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6038f/>

---

仕返し（？）のX'mas

2010年10月9日04時35分発行